



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	社会に抗する学生たち：全世界中の大学を毀つ暴力は過ぎ行く附帯現象なのかそれとも我々のとは精神的に異なる文明の創造を告げる初めの陣痛なのか
Author(s)	ケネタン, タヌギユイ ド; QUÉNETAİN, TANNEGUY de
Description	資料
Citation	北大法学論集, 20(3), 27-39
Issue Date	1969-12
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/27884
Type	departmental bulletin paper
File Information	20(3)_P27-39.pdf



資
料

社会に抗する学生たち

全世界中の大学を毀つ暴力は過ぎ行く附帯現象なのか
それとも我々のとは精神的に異なる文明の創造を告げ
る初めの陣痛なのか

タヌギユイ・ド・ケネタン

小山昇訳

(註)

月刊レアリテ誌一九六九年八月(二八三)号所収

資料

それは二ヶ年来異常な広がりをもった世界的な現象である。タイム誌は、一九六八年の第一四半期の間アメリカ、イタリア、メキシコ、エジプト、チェコスロバキア、日本、エチオピアというふうにちがった二〇の国で学生たちがデモったと計算している。で、この勘定はもちろん、その後が続いて起ったことの勘定ではない。フランスにおける五月事件、一九六九年一月における東京大学が殆んど破壊されたこと、一九六九年春のハーバード、コーネル、パークレーの諸大学の極めて重大な事件は勘定に入っていない。この現象は、実に多量の論稿を、しばしば相矛盾する結論の論稿を惹起したほど複雑であるが、これを分析せんとするまえに数字になった証拠を想起しなければならない。すなわち、若者は世界において次第次第に数多くなっているということである。

ユネスコの報告によれば、一五才から二四才までの若者は、一九六〇年には五億一千九百万であった。二〇〇〇年には十一億二千八百万であるだろう。しかも、これらの若者の四分の三以上が第三の世界に位置していることはたしかである。このことがアメリカまたは西欧で起ることとどんな関係をもつのだろうか？ それを知るにはさきの数字が他の数字、すなわち学生の人口の数字によって補われなければならない。概していえば彼らの数は世界

的に目ざましく増えつつある。一九六〇年から一九六五年の間に、一一〇〇万から一六〇〇万になった。つまり五ヶ年の間に六〇パーセント以上の増である。あるアメリカの調査によれば、アメリカでは一九五〇年代に二六〇万から七〇〇万になった。そして同じ時期に西欧の学生たちは七三万九〇〇〇から一七〇万になった。フランスでは、一九四五年には一五万三〇〇〇であったが今日では六〇万である。

ところで、このことはそれ自体が新しい現象である。以前には学生たちはマスの中に沈んだ小さな少数であった。いまや彼らは彼らだけでマスとなってきた。たしかにこのマスの中で、組織された抗争者たち [contestataires] は（一九六八年五月三日のタイム誌の調査によれば）マキシマム一〇パーセントであろう。しかし、人がそれをフランスにおいて確認することができたように、アメリカにおいて、ドイツにおいて、日本において、これらの少数者は乱闘の中に何千という穏健派を投げこむことができるのである。何をするために？この質問に対しただ一個の答えをするのでは十分でない。たとえば、ラテン・アメリカの諸国のような国において、チェコスロバキアあるいはまたエジプトにおいては、学生運動はまだ一九世紀の伝統と同じような伝統の枠内での運動である。それらはきわめてナショナルスティックである。それら

は、アメリカ・ソビエトの支配または△シオニスト▽に対する闘いとして出発した。しかも、学生たちは、彼らの政治的社会的権利回復要求において、孤立してはなかった。自由主義ブルジョア、知識人、労働者、農民は学生たちと一緒にすることができ、アルゼンチンのコルドバにおいて起ったごとく、学生たちとともに、バリケードを築くことができた。

これと逆に、非共産主義世界の先進工業国においては、△左翼▽学生運動は、強くアンティ・ナショナルスティックである。(△われわれはみなドイツユダヤ人である▽と二万の五月の抗争者たちはコーン・ペンディットに滞在禁止が通告されたあと、モンパルナス街で叫んだ。)その上、次第次第に自分たちの中に閉じこもり社会の他の層から切りはなされたごとくである。アメリカの労働者も、ドイツ、イタリーまたは日本の労働者も、学生たちの騒動には参加しなかった。フランスにおいては、五月事件の折り、学生たちの反乱が全体的な爆発を惹起し、労働者たちがぐらついたこともたしかである。しかし、このような不安定なはい連合が当時のきわめて特殊な政治的なコンテキストのせいであったことはよく知られていることである。

いったい彼らの闘いの意味は何か？、答えは、もし抗争者たちが述べるところにかかずらうならば、ごちゃごちゃしたものでし

かありえない。というのは西欧での学生運動の特徴は、無政府主義者、状況派〔situationists〕、毛派、トロツキスト、△衝動派〔spontaneistes〕▽等々、多くの小グループに分裂していることである。ローマでは、△ナチ・毛派▽さえあり、△マラ・サド▽グループがある。しかし大まかにいうならば、まず大学に、ついでそれ以外の社会に、直接かつ恒常のデモクラシーを樹立することがその基本イデーであることができる。それこそ、△学生権力▽、△参加▽、△共同管理▽あるいは△自主管理▽という魔法の響きをもった言葉が示すところのものである。大学や企業は、教授たち、パトロンたち、専門技術家〔technocrats〕たちの小さな少数によってではなく、すべてのそこで働く人々によって管理されるべきである。あらゆる階層制はそれ自体あやしいもので教えるものと教えられるもの、雇うものと雇われるものを区別する階層制も亦同じ。これはだから、まず大学の、つづいて社会の広汎な改革を誘うことになるのである。

しかし穏健派と活動家たちの間に亀裂が生ずるのもこの点である。エドガー・フォールのごとき大臣が、学生の権利回復をまともにも考えて、教授や助手たちとともに学生代表が席を占めるところの同教員会をつくったとき、このやりかたは、△左翼▽によって、即座に、△ブルジョア▽社会による学生反乱からの回復の

資料

企てとして、ひとつのわなとして宣伝された。たとえば去る六月にヴァンセンヌ大学センターで、極左グループ「Mao Spontex」(毛派「衝動派」)にぞくする一〇〇人余りの左翼が臨時諮問集会への選挙を妨害するために投票箱を破壊したのはそのためである。かれらの反対者は多数であったのに、そのリアクションが弱かったのに注意せよ。そのとき、警察をよぶべきであったのか？人はそうしなかった。それはもつともなことであった。というのは、他の活動家たちや、穏健派さえをも、襲撃者の陣営に傾かせるのは、いつも警察を呼んだことかまたは大学当局が処分したことであったから。パリであれ、ニューヨークであれ、ベルリンであれ、また東京であれ、そうであった。例えば、ハーバードで、去る四月に、一二〇名の極左派が予備役校募集の事務所が存することに抗議するため中央建物の中にバリケードをきずいた。学部長は警察をよび、警察はかれらを朝の五時三〇分に排除した。正午に一五〇〇人の学生が学部長の辞職を要求してデモった。…そして目的を達した。

もうひとつの特徴現象は暴力の 에스カレートである。五年前、パークレーで、学生たちによるキャンパスの初めての占拠がなされたとき、——かれらはキャンパスでの政治的集会の権利を獲得した——示威運動の連中は、警察に対して、ガンヂーヤルーサ

ーキングのスタイルで非暴力のタクティクをもって対抗した。つまり彼等は動かなかった。そして「サラダ籠」【逮捕用車】までポリスによって引ずられるにまかせた。しかし、昨年コロムビアで、学生たちは瓶や消火器で迎えた。そして、今年コーネルで、一〇〇人余りの黒人学生が大学建物の中にバリケードをきずき、カービン銃と連発ピストルで武装し、胸にはものものしく弾帯をかけた。学部長は流血を避けるために彼らの条件を受容せざるをえなかった。今日ドイツではSDS(社会主義ドイツ学生連盟)の合言葉は「テロリストを戦慄せしめよ」である。一九六八年四月に一人の革命左翼がフランクフルトの二つのデパートに焼夷弾をしかけることを認めたかどでSDSから追放されたのだが、五ヶ月後に彼は復帰していた。

ところでもし人が彼らを暴力そのものを礼賛するゆえに非難するならば、抗争者たちは「最初に引金をひいたのはわれわれではない」と答えるであろう。そしてこのことは多分にはほんとうである。もつとも明白なケースは、昨年春のパークレーでの騒乱で、石と瓶で装備した学生たちに対し、ポリスは、一斉射撃の火蓋を切り、一人が死に一〇〇人が負傷した。そして翌日一台のヘリコプターがキャンパスの上にヴェトナムで使われた吐気をおこすガスを散布した。さりながら、もし大学当局が学生が要求するすべて

のことに同意すれば騒ぎは避けられるだろうか？必ずしもそうではない。たとえば東京大学で去る一月、全学連にぞくする抗争者たちのグループが建物の中に入ってもつたのは、学生たちにより要求されたすべての改革案が受け入れられた後であった。ボリスとの戦いは大学が閉鎖されざるをえないという損害をつくつたのである。ローマのあるストライキ学生が何を要求するときかかれてあげた叫びについて考えよう。△要求じゃない、権限委譲でない、闇取引でない、対話でない、占拠はつづける。戦いは目標をもたない。戦いこそ目標だ▽。

この言は不十分ではあるが重要なひとつの最初の説明を示唆する。若者に欠けているものは戦争である。ただしヴェトナムの△きたない▽戦争ではなく、いわんや原子戦争ではない。欠けているのは、人類の黎明より一九一四年のマルヌの戦いに至るまで若者たちのために戦争がつくつたところの恐るべきかつ壮麗な、かの祭りである。かかる戦争のために、男たちをふだんの状態よりも高める飾られた制服や最上に美しい羽毛や最上に美しい彫物で人は自分を飾つたが、かかる戦争は今日では不可能である。近代戦争は全く醜い。そこには叙事詩の歌の中で讃えるようなものはもはやなく△聖なるかな、聖なるかな、万軍の神は聖なるかな▽と宣うようなものはやない。歴史におけるこのような激変

がどうして大きなフラストレーションをひきおこさずにおれようか？

△ボレモロギー▽（戦争の科学）の創始者、ガストン・ブートゥールは、その△戦争▽に関する書物の中で、伝統的な戦争と祭りはパラレルであるとした。すなわち祭りが△消費または浪費の儀式▽であるのと同じように戦争はてらつた破壊を伴うと。パツカスの祭りにおけるごとく、戦争は道徳上のタブーを廃し、ついで略奪を許し、殺人、強奪、強姦を許す。最後に、つい最近に至るまで、戦争という宇宙は祭りという宇宙のごとく美的な性格をもつ、すなわち、美しい制服、パレード、ファンファーレ。しかるに今日では制度化された大きな祭りはもはやなく、気狂いの祭りはなく、カーニバルもサトゥルヌス祭りも牧神祭もない。かくて若者たちは昔の大きな祭りを奪われてしまったので彼らの手法で祭りを再発明したもののようだ。去る六月に、ヴェトナム戦争に抗議するために、ヒッピーたちは紙つぶてでニクソン夫人とその娘を爆撃し、△もしこの紙つぶてがナバーム弾だったらあなた方は死んだだろう▽と叫んだ。そしてこの間に、魔女の装いをした少女の一隊が△地獄の女たちの国際的テロの陰謀▽と訴えながら、気味のわるい死の舞踏を演じた。これは、カーニバルの再版であった。ドイツでは、サトゥルヌス祭りが、部分的に、

資料

学生たちによって成しとげられた《hi-fi technik》によって再生された。これは、教授が述べるすべてのことを大声で笑い、ついで、少女の一隊が先生をのしり、裸になり、彼のまわりでワイセツな円舞をするのである。さいごにもう一つ、いわゆる戦争がある。ただしこれは古風な部族的なタイプの戦争である。人は野蠻ふうに変装し、アメリカでは（長い髪に鉢巻をした）アメリカンディーンのスタイルがとくに尊重された。この戦争は多くの騒音、多くの物的損害、多くの軽傷をもたらすものであり、重傷や死亡はできるだけ少ないはずのものである。

しかし社会はその味方にならない。あっちの側とこっちの側と、めいめいがちがったゲームのルールを実施し、相手方をごまかしと非難し、不誠実、挑発と非難する。抗争者たちは、《ブルジョア》社会に対する戦争に出発する。だが、彼らが、あれほどの激しさでもって、ソビエト体制やオーソドックスな共産党を告発するとき、その目標にどんな意味を与えるのか？ 非常にはつきりしていることがひとつある、それは若き学生たちが、結局、思索の指導者をもたないということである。彼らにとって何人かの英雄はいる。それら英雄たちは、毛またはゲバラのように、遠くにいることあるいは死んでしまったことによって、神秘的な色彩をもっている。しかし、彼らは彼らの先輩の中に真のガイドをも

たない。

思想家と学生運動との間には一時的な出会いはある。ドイツにおいては、フランクフルト学派のマルクシスト哲学者 Habermas と Adorno の場合がそうであった。だが、かれらが、モロトフのкоккテール【火焰瓶】の使用を認めることを拒否してからは、完全な仲たがいとなり、Adorno は《hi-fi technik》の犠牲となり、その講義を中止せざるを得なかった。それから、マルクーゼ [Marcuse] は、ローマで革命左翼のあるグループによって弥次られた。その中にダニエル・コーン・ペンデイトがいて彼はマルクーゼに、《Herbertよ、なぜCIAが君に金を払ったかをいえ、マルクーゼよ、なぜ君はブルジョアの劇場に行ったか》と叫んだ。これに対しマルクーゼは《ブルジョアの劇場だけが私を招待したからだ》と答えた。

おそらくこのような状況をもっともよく説明する言葉は、ナンテールの落書きに読むことができたところの《教授たちよ、あなたがたは老いぼれすぎている》という言葉である。

グルノーブル大学文学部の助教師 [maître assistant] である シェル・フィリベール [Michel Pithérel] はその《年齢の構梯》に関する注目すべき書物のなかで、彼の眼に現代社会の二つのき

わだつた特徴であると思われるもの、すなわち諸年齢の分離と諸年齢階梯の逆転とを訴えている。まず第一に、彼は、若者とは近代社会が創り出したものであることを確証する。昔は、一方に子供たち、他方に大人たちがあった。一九世紀のはじめにまず若い娘が創り出された。人は未婚の若い婦人を純潔と無邪気 [innocence] の台石の上におきそこから降りてはならないものとした。眼にみえない柵をはられた籠である。そして勉学期間が延長されることによって、若い男が創られた。サルトルの「汚れた手」の中に、(労働者出の) Heider と (ブルジョア出の) Hugo の間のきわめて特徴的な対話がある。Heider «青春 [la jeunesse] …私はそれが何かを知らない。私は幼年からただちに大人の年に移行した」。Hugo «そうだ、それ【青春】はブルジョアの病氣だ、それが原因で死ぬやつが多い」。多分、戦前においてはまだ一部少数に限られていたこの「ブルジョア病」が「若者たち」の多数に拡がりつつあるということからあらゆるドラマが生まれるのだろう。人は次のようにいうことができよう、第一段階においては、工業社会は労働者を作り出して農民や職人と並ぶ一つの新しい社会階級を創った。第二段階では、工業社会は、大人の一部をとって「若者」と「学生」を作り新しい年齢階級を創った。そして、第一の亀裂は、今日、生活水準の上昇と教育の進展によ

って緩かだが確実に無くなる傾きにあるのに、この教育の進展こそが「若者」と「大人」の間に新しい亀裂を創るのである。しかし、大多数の思想家は、なかなしくヨーロッパにおいては、無益にも、この現象をマルクシストの解明方式の助けをかりて分析せんとし、抗争者たちは別なものを発見し得たとしているが同じ誤ちを犯している。マルキシズムは要するに、革命的な運動を説明しまたはジャステイファイするため人が現に役立たせうる唯一のイデオロギーとただ一つの語彙を提供するものである。しかし、社会的諸階級の格闘に適用されるイデオロギーが、年齢の階級の間の衝突にいかにして有効でありうるだろうか？それは有効でありえないのだ。そこから、スローガンが理窟にとって代るうとしていくところの諸小集団が出現する。そこから、すべての先生活方を、マルクシストであろうがなかろうが次第に拒否することが起る。そこから、反乱または革命を、ある理論によってそれをジャステイファイすることが必要であることとなく、それ自身実りある出来事とみるアナキストの黒旗が再び出現する。だから、学生の反乱の荒れ狂った自棄的な性格は、類似した理由のゆえにコミューナル【一八七一年のパリ・コミューヌの一味】の反乱を想起させるのだ。カール・マルクスのいうことをきくことの方がより有効であつたらう時期にコミューナルがジャコバン

資 料

主義に従つたと同じく、学生たちは、マルキシズムがもはや状況に適用されえない時期にマルキシズムに従っている。

この状況とは次のようなものである。近代社会は大人を三つの年齢層に分かつ。若者、大人、老人である。若者は職業的な社会的な一切の責任の外で、高校および大学とよばれる閉じた宇宙のなかで、勉学を仕事とする。大人は一切の責任をもち、老人は活動的な生活から疎外され退職金のおかげで生きつつけることができる。すべては、社会が人口の飛躍的増大と生命の延長とをアクトヴな人口の減少の増進によつて償っているかのよう経過する(フランスでは、それは一九五〇年には四七・四パーセントであつた。一九八〇年には四二パーセントに達しないだろう)。かかるシステムの中では、けつきよく、だれもほんとうには晴ればれとなりえない。老人たちはもはや都市の賢人ではなく、経済的に弱きものである。大人たちとは、他の二つの年齢階級をその労働により生存させるために、その生産を増さねばならない。若者については、大人の責任から隔てられたままの状態を長びかされて小児化している。若者をかく分離することは青春の神話化 [Une mythification de la jeunesse] を伴う。百年前の純潔な若い娘のように、全体として若者は今日台石の上におかれている。人は、若者たちが考えることに不安をもち、新しい波は何

かと問ひ、若者のためにリザーヴされたモードがあり、青年バトロン、青年農業者、キリスト教勤労青年でありたいと願う。この隔離崇拜 [Ce culte de l'écart] は商売や広告にめざましく利用され、消費の社会によつて極端にまですすめられた。こういつたことが大へんうまくいつたので、若者たちは自分たちだけ離れて、サブ・カルチュアを創造し、自分たちの固有の英雄をもち、自分たちの神話をもち、自分たちの固有の服装、気に入りのレコード、偶像をもつ。昔は、村での祭りに、宮廷での大舞踏会のように、老いも若きも同じたのしみの中で隣りあつたのに。

社会に対する戦争に向つて出発して、若者の知的な前衛である学生たちは、若者のために大人の身分を要求する。フランスの大都市の学生たちが女子の宿舎に自由に入る権利を要求したのだが、それはセックスの宴に耽溺するためではなく、自由な自分の行為に責任をもつ大人として認められるためであつた。だが、——そしてまさにこの点で彼らの態度はあいまいのだが——学生たちは、大人として認められることを欲しながら自分たち以外の大人と異なることを感じかつ欲するのである。そして彼らのうちのあるものは、いつか年長者 [adults] というカテゴリーの中に

入るといふ想念に恐怖感をもつのである。要するに、年齢のクラスと社会的なクラスの本質的ながいは、年齢のクラスは永続きする状態ではないということである。

私がCALにぞくする十八才のリセー生徒たちとこの問題をとりあげたとき、その一人が私に答えた、「わたしたちの行動が非常に激しいのは多分そのせいでしょう。わたしたちはそれがはかないものであることを知っています」。

いったいなぜこのように老いることを恐れるのか？ 伝統的な社会においては家族的な宇宙の中で大きくなった子供といつの日か彼を迎え入れる外の社会との間には、父という媒介者がある。しかるに、近代社会においては、父の役割の弱体化、さらには、瓦解をみるのである。マルクーゼは「単一次元的人間」[「Homme unidimensionnel」]のなかで、いかにマス・メディアとくにテレビジョンが父の先導者の役割にとってかわろうとしているかを示した。或る事は、もはや、「そう言ったのはパパである」がゆえに真なのではなく、「テレビでそうきいたがゆえに」真なのである。その上、父の働きはもはやしばしば彼の優越性、彼の男らしさの誇示として見られない。ドイツの心理学者アレクサンダー・ミッチェルリヒ [Alexander Mitscherlich] は、「工業的量産とマスの複雑な管理とに結びつく労働の細分化の増進、住居と

労働の場所との分離、職人または小規模生産者の俸給を受けたり消費物質を使用する労働者または被傭者への移行は父の權威 [auctoritas] の中味を空にし、彼の権力を家庭の外におけると同じく中においても減らすことに役立つことを止めなかった」。人は父のやっていることを知らない。私の友人の一人は政治学院の助教 [maître de conférence] であるが、彼はある日、彼の生徒のなかの一女子学生から話しかけられた。彼女は全く恐縮して彼に質問した。「言って下さい、先生、人は事務室でなにをしているのですか？」。また、父は、自分よりも進んだ勉学をした息子に追越され、あるいは、自身、自分の労働によって消耗して子供たちの活動に関心をもたなくなり、あるいは、趣味道楽やつまらぬもの [gadgets] や週末の気晴らしに没頭してその他のことに関心をもたないのである。「リセーでは、親たちが欠席簿に眼を通しもしないでそれにサインすることがしばしばある」とポール・リケール [Paul Ricoeur] は私に述べた。父が不十分であるために、多くの若者たちの平衡を失なわせているような父親嫌いの衝突 [conflict odipien] を拙劣にしか解決できない結果となる。ポール・リケールは、彼が「二つの思春期」の現象とよぶ現象を認める。すなわち、「文化的・政治的思春期」というのがあり、今日それは非常に早くなっている。しかし情の思春期は少な

資料

くとも五年遅れている。若者たちは、いろいろと多くを知らされているが、自己に対する規制力を欠き、真の自治、人格の十分な統合性を欠いている。父の無能がそのことに大いに責任がある。父を欠くので、若者たちは、教授に向かってくる。しかし、つめこみすぎたクラスで、大学の超満員の大講義室で、教授は遠くの、人間味のない、多忙すぎ、けっきょく無力な人物として現われる。ナンテールの危機の起りの原因の一つは、《Existence》

(ある学部教授の偽名)によれば、《教員と事務職員とのごちゃまぜと不組織とであった。それはフーシェの改革といわれる高等教育の改革のゆえにそうなったので、この改革は急いで押しつけられ、必要な措置をほとんど伴わなかった。枠の中にはめこむ作業が目標も方法も確かでない場合には、基礎に信頼がおけない。ものをよく知っている先生たちが、自分たちをモデルと考えてやって来る人達に、自分はなにも知らないという光景(規則もプログラムも知らず、学生の気持も希望も知らない)をみせるとき、学生たちが安全に生きて来た宇宙は瓦解するのである。》

つまるるところ、父を押しつぶし、教授さえも押しつぶして、人が《社会の力》 [le pouvoir social] へとまることができるところの多岐で限界不定 [incertain] の万能の力がそびえ立つ。大へん鋭い社会心理分析の書物(父に抗する反乱) La Révolte con-

te le père)において、ジェラール・マンデル [Gerard Mendel] は、テクノロジが歴史以前の人によって母なる自然に付与された自由自在のこの万能の力をいっば取りかえして目ざましいしかたで社会の力を強めた」と評価した。心理学的な面においては、われわれは抑圧的な性格を示す進化に直面するであろう。

ジェラール・マンデルのイデーはつぎのようなものである。先史の時期には自然の力に対し服従し従順であるという宿命論的なプリンシプルが支配した。自然は全宇宙の母であり全能であり、幼少期、栄養を与えると同時に奪う [frustrate] 母のイメージに生きた……。ついで、《新石器時代の初期に、歴史上の人々》 [peuples de l'histoire] が現われ、家父のプリンシプルを支柱とし、漸次その力を自然の上に加え、反省 [reflexion]、言語、合理性を發展させた。しかし、テクノロジが、發展過程のある段階から、われわれを第三の局面に入れた。そこでは社会の力は、家父の合理性と養う母の議論の余地のない全能とを同時に表わす。この二つの力と二つのシンボルの重なりは社会の力に我慢のならない圧制的な性格を与える。その上、議論を認めない合理性というものは、真の合理性なのか？

かくて抗争者たちは、このような体制の矛盾、さらにその迷誤

をあげくといういぢわるで有用な慰みをする。一例をあげよう。

かれらのうちあるものは、ドイツで、デパートに対するテロ行為を礼讃した。何故か？デパートは、一定の経済的機構を代表し、この機構の中では社会的富は定期的にくわされねばならぬからである。労働・時間・資材の並外れた浪費が起るのは、二年ごとにモデルを更新する必要があるからである。なかんずく、持久性のない物を生産することや変った趣味の包装が問題とされ、現在の生産物を改善することを問題としないで販売を改善することを問題とする……▽。ポール・リケールは、人がもし抗争学生の一人に、君の行動の目的は何か？▽ときいたら、彼は、あなたはなんですか？▽と答えることができるだろうと私に注意してくれた。そしてまさしく、リケールは、その点を追求して言っている。△では、工業社会の終局目標はなにか？多くの人は、工業社会は生産と膨張以外の目的をもたないという感じをもっている。だが自己増殖以外の目的をもたないことはガンの現象である▽。アメリカ社会がこの種のものの中の最良の代表であるということから、反アメリカニズムは自尊心のあるすべての抗争者（この中には合衆国のそれも含む。合衆国では抗争者たちは Buffalo Bill に対する Geronimo の役割を演ずべく欲するようにみえる）にとって必然的にせひとも必要なことである。しかし、ソビエト

社会がアメリカ社会と競争することを目的として熱中するゆえに、ソビエト社会が△利潤のプリンシプル▽（マルクセ）に身を捧げるがゆえに、党の官僚独裁が西洋の技術専門家独裁と張りあうがゆえに、ソビエト社会は同様に暴力でもって忌避される。

毛の人氣は、彼が党の官僚に対する新しい革命をするために、若者の反乱を利用したことから来る。そしてこの革命は利潤の改善を目的としないで道徳的に人間を変えようことを目的とした。抗争者たちの心を打つのはこの点である。彼らの年長者が経済合理性に訴えたのに対し、彼らはアクセントを社会的正義、兄弟的平等の上においた。彼らの論ずるところは非常にしばしば道義的であり、精神的とさえいえる。それゆえ、もし大へんにうれうべきいくらかの狂信者をわきにのけるならば、学生たちは近代社会のなかで予言的機能とよぶことができる。ところのものを行なっているということができる。聖書にかかれた時代においては、定期的に、不正なことに対してはげしく非難するために砂漠から立ち現われる怒れるひげの人があった。人はかれらを△予言者▽と呼んだ。キリスト教のヨーロッパでは、修道僧がこの役をつとめた。ブルジョアのヨーロッパにおいては、左翼知識人が、今日の技術社会においては学生がこの役をつとめる。ところでそれを聴

資料

くかわりに△予言者を石もて殺す▽社会は危機に瀕した社会である。たしかに無条件に降伏することが問題なのではなくて、すくなくとも人はその述べられることを聴くことはできるし、えりわけることができるし、根拠ありと思われるものを取り込むことができる。たとえば、大人たちが年齢のクラスに分割されたことにより生じた諸問題は、きわめて真剣に考慮されるべきものである。

もし人がこの分割は不可避であると評価するならば、各グループに、権利、義務、社会的責任を与えてこれを制度化しなければならぬ。△若者▽と△老人▽とが、いまなおそうであるように、△大人▽から分離されていることは正常なことではない。事実として現われた△学生の力▽は△法的に▽承認されなければならない。あるいは人がこの分割は敷かわしいと考えるのなら、そのときは大学レベルでは、ミシェル・フイリベールやポール・リケエールが提唱している恒常的教育といった方式を試みることが考えられよう。一五、六才の年齢から、勉学は企業内での労働の時期によって中断されよう。大学の△学年▽は人生のいかなる時期においても獲得されうるころの単位（八単位が現行制度の一年にあたる）によってとつてかわられよう。かくして、人は奇しくも「子供、青少年、成年、年寄り」[pueros, adolescents, juvenes, senes]といった最も多様な年齢の生徒[scholiers]が同じベンチ

に並んで座した中世の大学に近づくのである。これは大学制度の全面改訂ばかりでなくなかんずく現在の社会の全面改訂を意味する。

その他のショッキングな異常さはすみやかに撲滅されることができらう。ユネスコの青少年部を指導しているヴァグリアニ[Vagliani]氏が私をして注目させたように、△なぜ、多くの国々で、人は、戦争をすることが問題であるときに若者は一八才で大人であると考え、投票することが問題であるときにそうは考えないのか?▽。学生の危機がどう進化するかは、事実、年長者たちの態度如何にかかっている。彼らが柔弱であることを示すならば人は冒険主義のほうへ滑ってゆく。彼らが厳格であるならば、値打ちのある抗争者たちは狂信者ごとくちやになつてしまふ。そして、後者を少数者にとどまらしめるためには、社会は精神において同時に閉ちかつ開いている態度を示さなければならない。

(註) レアリテ誌はフランスの有名な月刊総合雑誌。一九四六年創刊。時事・思想・評論・統計・人物・演劇・芸術・宗教・旅行・建築・教育等に関する記事・写真を掲載。本社の所在地は、13 rue Saint-Georges, Paris (9), 欧米、アフリカに支社が多い。社長は Robert Salmon 氏、価格は、各号一フラン、外国向予約年額一二三フラン。本論文執筆者、タヌギエイ・ド・ケネタン

氏は本誌の評論欄の主筆。英語版が既に存在するが、わが国のダイモンド社と一九七〇年一〇月以降、日本版の出版について契約が成立している。本論文の翻訳と北大法学論集への掲載出版については、小山教授（現パリ大学都市・日本館館長）がレアリテ社の許可をえてある。

（小山教授送付資料およびGrand Larousse Encyclopedique, 9による。なお訳の本文中若干の字句について手を入れさせていた。深瀬忠一記）

（——線は原文中、太字。編集委員註）